

令和4年度 第1学期 終業式

令和4(2022)年7月19日

みなさん、おはようございます。今日で令和4年度第1学期が終わります。1学期の始まり、4月8日の始業式の校長講話で、私は自分の大切にしている事として「切に生きる」という話をしました。

人は、それぞれ何かの事情を背負っている。生徒の皆さんだって一人ひとり、自分の努力だけではどうすることもできない何か。すぐに解決することはできない何かを背負っている。大切なのは、当面は背負うしかないその何かに意識が集中するあまり、すべてがダメだと絶望しないこと。その何かをあまりに都合良く自分への言い訳にしないこと。その何かを背負いながらも、今、自分の目の前にあること、今、自分ができることにひたむきに努力していくこと。それが、始業式に私が話した「切に生きる」です。

この1学期、皆さんはどうでしたか。自分なりに、「切に生きる」ことができたかどうか、あらためて振り返ってみて下さい。

始業式の校長講話の終わりに、私は、次のように締めくくっています。「生徒一人ひとりにとって、この令和4年度が実り多く、素晴らしい年度になることを心より『念じ』、令和4年度第1学期始業式の校長講話とします。」

さて、3年次生、2年次生は私が講話の終わりに、普通ならば「期待して」とか「願って」と言うところをあえて「念じ」・・・「念じる」という言葉をこれまで多く使ってきたことは気づいていましたか。今日の1学期終業式の校長講話は、なぜ私がこれまで「念じる」という言葉を多く使ってきたか、について話をします。

この「念じる」という言葉は、「念ずれば、花開く」という言葉からきています。この言葉は、熊本県出身で「癒しの詩人」と呼ばれた、坂村真民（さかむら しんみん）の詩の一節に出てくる言葉です。次が、その詩です。

念ずれば 花ひらく

念ずれば
花ひらく
苦しいとき
母がいつも口に使っていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

坂村真民は、明治42年、熊本県に生まれます。8歳の時に、父親が急に亡くなり、家族は経済的にどん底の生活になります。5人兄弟の長男として母親を助け、幾多の困難に立ち向かいながら、国語の高校教員になります。65歳で定年退職すると、詩作に打ち込み、多くの詩集、随筆集、詩画集などを出され、平成18(2006)年に97歳で永眠されました。

この「念ずれば、花開く」・・・これは、ただ念じていれば、じっとお願いごとをしていれば、夢がかなうという意味ではありません。

「念ず」・・・「念じる」とは、「自分はこうなりたい」と、心に強い思い、強い願い、願望を持つこと、そして、持ち続けることです。そうすると、その強い思いが自分の日々の行動に自然と現れてくる。自分が少しずつ変わる。そうすると、周りが自分を見る目も変わってくる。たとえ、一日一日の変化は小さくて目に見えなくとも、着実に培っているものが自分の中にできてくる。それは、いつかつぼみとなり、大きな花を咲かせる。これが「念ずれば、花開く」です。強い思い、願望を持つということは、生きていく時の道標を持つと同じです。「どうしても、どうしても・・・」という強い思いは、それを実現させるための知恵と工夫を生みます。そして、何より強い意志、肝の据わった態度、強く生きる姿勢をつくります。

「念じる」の「念」という字は、「今」に「心」と書きます。「念」とは、まさに「今の心」であり、「自分の、今の心に、しっかりと向き合う。」という意味があります。人が何事かを為そうとする時、最初から「できるか」、「できないか」を不安に思うと、心の中に「ためらい」が出てきます。この「ためらい」は誰の心にもありますが、その強さ、大きさは、その人の心の有り様で変わります。だから、今の自分の心にしっかりと向き合い、「ためらい」がある自分の心を認めながらも、「自分はこうなりたい。こうでありたい。」という強い思いで自らを奮い立たせていかなければなりません。そして、実現するために、計画を立て、具体的な行動に移し、粘り強く実践していく。これら全てが「念じる」という言葉の中に含まれている、と私は考えます。

逆に、強い思い、願望がないと日々の活動の多くが受け身となり、惰性で時間がただ過ぎていってしまいます。自分の今の心にしっかりと向き合おうとせず、「今、この時」をいい加減に生きてしまう。すると、次の瞬間、次の今も、また、いい加減なものとなり、これを繰り返していけば、結局、いい加減な人生しか送れないことになってしまいます。「念ずれば、花開く」の反対、「念ぜずば、花開かず」になってしまう、ということです。

そうならないために、人としての在り方、生き方までを含め、自分の将来、未来への強い思い、願望を自分の心の中にしっかりと持つこと、持ち続けることが大切です。

とくに、3年次生。本校卒業後の進路実現まで残された時間はあと数か月です。進路実現における自分の強い思い、願望を持ち、今、この時を切に生きてください。運動部3年次生の多くは、6月のインターハイ予選を最後に部活動を引退した人が多いと思います。部活動の多くは、どこかで負けて終わる、あるいは選ばれずに終わる、ということを経て

現役引退となります。負けずに最後まで勝ち続けて、あるいは選ばれ続けて、終われる高校生は全国でほんの一握り、全国優勝・全国制覇を成し遂げた生徒だけです。部活動にひたむきに取り組んだほとんどの生徒は、本校生に限らずどこかで負けて終わります。

一方で、定期テストや模擬試験の結果など学習面で自分の思い描いていた結果とはならず、悔しい結果に終わっている生徒もいると思います。

壁にぶつかり、上手くいかなかった結果に直面したとき、その人が生きていくときの姿勢が現れます。皆さんには、上手くいかなかった結果に対し、あまりに都合良く自分に言い訳をつくり、ものわかり良く自分で納得して、易々と受け止めてしまう高校生であって欲しくない、と思います。

負けたら、うまくいかなかったら、整理しきれないほどの悔しい思い、受け止めきれないほどの痛みを抱え、その悔しさ、痛みをエネルギーに変え、然るべく次の行動に移る。さくら清修高校の生徒は、そうあって欲しいと強く思います。

本校は、明日から8月25日まで、37日間の夏季休業・夏休みに入ります。暑い中での夏季課外、受験対策学習会など進路実現に向けた学習は辛いでしょう。一方で、3年次生が引退した後、新たに2年次生・1年次生に代替わりした部活動では暑い中でのトレーニングや基礎練習などキツイこともあると思います。

そういう時こそ、整理しきれないほどに味わった悔しさ、痛みを思い出し、それをエネルギーに換え、強い思い、願望を持ち、自らを奮い立たせ、その壁を乗り越えていって欲しいと思います。もちろん、新型コロナウイルスや熱中症にかからないよう、スキはつくらない。

授業も部活動も学校行事も、本校におけるすべての活動は、将来どのような社会であっても、強い思い、願望をもち、自らを奮い立たせながら、自分の未来を逞しく切り拓き、自分の花をみごとに開かせるためのものだということを忘れないでください。

「念ずれば花開く。」このことを各生徒が肝に銘じ、暑いなかのキツさ、辛さにめげることなく、自分が目指すところに向かって、着実に力を蓄える夏休みにしてくれることを「念じ」ます。

8月26日の2学期始業式には、より逞しくなった、元気な顔を見せてください。

以上で1学期終業式の校長講話を終わります。